平成 21 年度　保育サポーター研修会

と　き　平成 22 年 3 月 7 日（日）
ところ　山口県医師会館 6F 会議室

[報告 : 理事　田村　博子]

県医師会では山口県の「山口県女性医師保育等支援事業」を受託し、昨年 7 月に専門の保育相談員を採用して保育相談窓口を設置、その後 9 月には保育サポーターバンクを設立した。保育サポーターとは、女性医師が出産・育児と仕事が両立できるよう必要な支援を行う人材で、研修会を開催した時点では登録者は 64 名であった。バンクの運営は女性医師参画推進部会の育児支援のワーキンググループのメンバーを中心に構成された「保育サポーターバンク運営委員会」があたり、年 1 回のサポーター研修会を行うこととした。今回の第 1 回研修会には 37 名のサポーター、医師会関係者からの紹介者 8 名の計 45 名の参加があった。

研修会は木下県医師会長の挨拶に始まり、女性医師参画推進部会の上田聡子理事によるバンクの説明、横山幸代理事による講演「子どもの病気と事故の応急処置」、昼食時間を利用した意見交換会が行われ、女性医師参画推進部会の松田昌子部会長の挨拶で締めくくられた。

保育サポーターバンクの説明

部会理事　上田聡子

現在女性医師の割合は増えているが、年齢別にみると若い年齢層ほどその割合は高くなっている。だが、国際比較でみると日本の女性、そして女性医師も育児の時期に離職する傾向があり、女性の年齢階級別労働力率は M 字カーブを描いている。したがって増加している若い女性医師が育児時期に離職せず、働き続けることは医師不足対策に重要である。長時間勤務、子どもが病気でも休めない、当直や夜間勤務、緊急呼び出しの可能性といった女性医師の勤務の実態から、保育施設や学童保育の時間外の保育をサポートする必要があるし、できれば同一の人に比較的長期にわたってみていただくことがのぞましい。しかし女性医師が自分一人でサポーターを探すことは大変困難である。そこで、県医師会では育児中の医師を対

象とする保育サポーターを募集しバンクに登録していただき、保育相談員が女性医師とサポーターのコーディネートにあたることにした。

サポーターの支援の内容は基本的には女性医師が仕事と家庭を両立させるために必要な支援とし、具体的には両者の合意に基づいて決定する。たとえば、子どもの預かり保育(サポーター宅又は女性医師宅)、子どもの送迎、保育と併せての家事支援などである。報酬は双方が話し合いで決めることとした。

具体的には女性医師から保育相談員に支援の相談があると、相談員がニーズに応じたサポーターを調整、紹介し、場合によっては医師とサポーターの面談にも同席している。

トラブル防止のため、サポーターは支援活動開始時に「施設賠償責任保険」及び「生産物賠償責任保険」に加入するものとする。加入手続きは県医師会が行い、保険料は県医師会が負担する。

3月1日現在相談件数は12件になり、そのうちサポーターをお願いし活動が始まったものが3件。なかにはそのおかげで常勤を続けることができた医師もあり大変感謝されている。

講演「子どもの病気と事故の応急処置」

部会理事　横山幸代

薬の飲ませ方、坐薬の入れ方に始まって、よくある症候（発熱、けいれん、咳、嘔吐、下痢、鼻血など）の対処策、経口補水液の作り方等、大変わかりやすく説明された。次に子どもの死因をみると、どの年齢層でも不慮の事故が多いことを示し、「子どものための危険学」という冊子(畑村洋太郎作　ちかいしなおこ絵　危険学プロジェクトグループ編)のイラストを使っておぼれる、やけど、誤飲・誤嚥、窒息、転落、挟まれる、といったこどもが出会う可能性のある危険の具体的な対策法、心肺蘇生、異物除去、けが・打撲の応急処置法の説明があった。

（危険学プロジェクトの冊子は下記ホームページからダウンロードできます。http://www.kikengaku.com/public/）

昼食懇談会

昼食時間を利用して、意見交換会も行われ、その中ではKRYテレビ（リアルタイムやまぐち）で放映されたサポーター活動も上映され、サポーターの理解を深める一助となった。また、実際番組で取材されたサポーターご本人も出席されていたので、意見や感想をうかがうことができた。座席は地区ごとにまとめていたので、昼食後はそれぞれの地区での情報交換の場になっていた。

質問では保険や訴訟に関するものがあった。終了時に回収したアンケートでも保険もある点が安心したという記載もある一方、裁判や訴訟といった言葉に気が引けたとおっしゃる方もあった。また研修を受けて、サポートの必要性がよくわかったという意見がある一方、責任重大なので一人では引き受けるのを躊躇するという意見もあった。

研修会を終えて

第1回目ということで参加人数の予測が難しかったが、大方の見込みより多数の参加者があった。地区別にみると山口地区が最多で13名、下関地区が9名、遠くは岩国から3名来られており、アンケートには研修会を地域ごとに行ってほしいという意見もあった。50～60代の女性が多かったが、男性参加者も2名あった。翌朝の毎日新聞、読売新聞にも関連記事が掲載された。サポーターバンク登録者は徐々に増えているが、個々の医師が必要とするサポートの内容は多岐にわたるので、さらに広報活動を通じ、この事業を周知する必要がある。幼い子どもをかかえていても安心して働き続けるためには、ニーズにきめ細かく対応してくださる質の高いサポーターの存在が必須である。そういう意味で今後も研修会を開催していく予定である。

最後に、本稿を読まれた会員の皆様も周りにサポートを必要とされる方、またサポーターになってくださる方がおられましたら、相談窓口及びサポーターバンクのご紹介をお願いします。